



古道が紡ぐ物語



南・山の辺の道（たたなづく 青垣 山ごもれる）

^{いそのかみ}石上神宮（天理市）から、桜井市の大和川（初瀬川）畔の^{つばいち}海柘榴市までは南の山の辺の道ともいわれ、大和青垣の山麓・丘陵部をたどるのどかな道である。多くの部分が「東海自然歩道」に組み込まれ、案内標識や休憩施設の整備も進んでいることからハイキングシーズンには賑わいをみせる。

崇神天皇陵などの古墳群、古代都市が眠る^{まきむく}「纏向」、卑弥呼の墓説もある「箸墓」、さらには日本最古の神社といわれる^{おおみわ}「大神神社」とその数々の^{いにしえ}撰末社を巡り、古の国内外との交流拠点であった海柘榴市まで歩くことができる。日本の国家発祥の地である大和国原（^{やまとくにはら}奈良盆地）を一望しながら、「記紀・万葉」の神話・伝説をたどるコースはまさに日本の原風景ともいえる。

「石上神宮」から南へ

南の山の辺の道の起点となる^{いそのかみ}石上神宮は、朝廷に軍事で仕えた古代の豪族物部氏の^{いそのかみ}総氏神である。日本の国家形成期に重要な影響力があり、記紀で「神宮」号を称するは伊勢と石上だけである。

神宮に伝わる国宝^{しちしとう}「七支刀」は、剣から六本の刃が枝分かれした特異な形状の鉄剣で、その銘文には「泰和四年」（西暦 369 年）と解読される年号が入り、大陸で製作されたと考えられている。

創建時から本殿は存在せず、拝殿の奥の聖地（禁足地）が^{いそのかみ}拝されていたが、明治期の発掘で御神体である神剣^{ふつのみたま}「布都御魂」が出土し、大正 2 年に本殿が造営され奉安された。

石上神宮から南へ、のどかな^{やっ}田園地帯を「夜都伎神社」、^き「竹ノ内環濠集落」とたどり、龍王山西麓の丘陵地帯へ至ると大和古墳群である。最も北に位置する西殿塚古墳は、大王陵に匹敵する規模で、明治 9 年には、第 26 代継体天皇の皇后・^{たしらかのひめみこ}手白香皇女「^{ふすまだ}衾田陵」に治定されているが、年代的に合わないという説もあり謎は深い。

さらに進むと弘法大師開基の「長岳寺」門前に至る。本尊阿弥陀如来像は、水晶製の写実的な眼がはめ込まれた玉眼様式とよばれ、我が国独特のこの技法が最初に用いられた仏像である。

隣接した「トレイル青垣（天理市トレイルセンター）」は、周辺の観光情報を提供する公設の休憩施設で、天理・桜井間のほぼ中間に位置するこ



「石上神宮」。常緑樹が茂る境内には神鶏が放し飼いされ、「カケコー」の音が響く。



第10代崇神天皇陵。学術上実在可能性が高い最初の天皇とされる。

ともあり山の辺の道探訪の拠点となっている。

日本の国家創成期を飾る古墳群

この辺りは、大和古墳群、柳本古墳群、纏向古墳群が続くまさに大和王権発祥の地で、「崇神天皇陵」や「景行天皇陵」の大王墓が目を引く。

第 10 代崇神天皇は、学術上実在可能性が高い最初の天皇とされ、和風のおくり名は、神武天皇と同じ「はつくにしらすすめらみこと」と称えられることから、両天皇を同一視する説もある。

また、第 12 代景行天皇の皇子が西日本や関東の遠征説話で有名な日本武尊^{やまとたけるのみこと}である。遠征の果てに亡くなる際に、故郷を偲んで詠った「倭は国のまほろば たたなづく 青垣山ごもれる 倭し美し」の歌は、奈良の情景、さらには日本の原風景を表す歌として今も有名である。

古墳群の南に広がる丘陵地帯は、弥生時代後期から大和王権創成期（3～4世紀頃）の「纏向遺跡」である。遺跡内には倭迹迹日百襲姫命やまとととひもそひめのみことの墓と伝承される「箸墓古墳」があり、最近の研究では3世紀中頃から後半の構築とする説も出て、卑弥呼の墓ではないかとも言われている。

山裾に向かって上り坂の道を行くと、相撲の発祥の地と伝えられる「相撲神社」がある。さらに上れば「穴師坐兵主神社あなしにますひょうず じんじゅ」で、創建年代は不明ではあるが、景行天皇が八千矛神やちほこのかみ（大国主）を祀ったともいわれ、古墳時代に遡ると考えられる。

「うま酒の三輪」から「海柘榴市」へ

ここを過ぎると三輪山の山裾で、「大神神社」の摂社「檜原神社ひばら」に至る。拝殿も本殿も無くご神体は三輪山で、中央の鳥居の左右に脇鳥居を備えた三輪鳥居という独特の形式が珍しい。この神社は、天照大神が宮中から伊勢神宮に遷座するに至る物語に深くかかわり、一時は天照大神が祭祀されていたことから元伊勢とも呼ばれる。

さらに山裾を進むと「狭井神社さい」で、同じく大神神社の摂社である。三輪山の山頂には高宮神社があり登頂も認められているが、登拝の受付はこちらの神社で行われている。

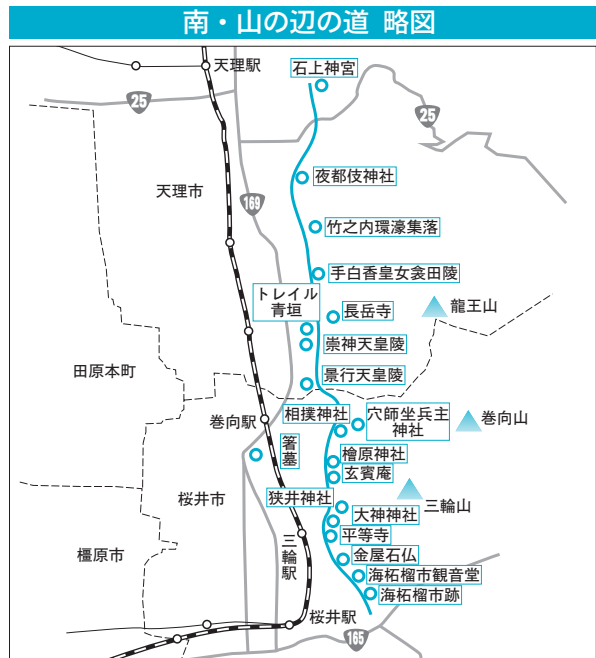
拝殿の左手、「薬井戸」には万病に効くとされる御神水ごこうすいがこんこんと湧出し、酒造家、製薬業者、書家などにも愛用されている。

そしていよいよ本社である「大神神社」に至る。主祭神は大物主大神おおものぬしで、その魂が宿る三輪山そのものを神体（神体山）としており、本殿は無く、拝殿から奥にある三ツ鳥居を通し三輪山を拝する原始神道の形態を残している。

古来より蛇が三輪の神の化身とされるが、蛇は水神、雷神であり、農業、五穀豊穡の神として敬われる。また、日本書紀では、崇神天皇の時代、疫病の流行による混乱を鎮めるため三輪で醸した酒を奉納したところ、疫病は止み国が富んだとされていることから、全国の酒造家の信仰が厚く、「うま酒」は三輪の枕詞ともなっている。



「大神神社」二の鳥居（上）とその摂社の元伊勢「檜原神社」(右)。



「大神神社」を南へ進み、山の辺の道が初瀬川（大和川上流）に出ると、いよいよこの道の終点、南の起点でもある「海柘榴市つばいち」である。

大和川水系の舟運と東西南北に交わる道が繋がる要衝であり、記・紀、万葉集にもたびたび登場する交易市で、大陸からの使節も到着する国際色豊かな港でもあった。

今は、当時の賑わいは無いが、日本に仏教が伝わった土地でもあり、河川敷公園が整備された初瀬川のほとりに建つ「仏教伝来の地」の大きな石碑が往時をしのばせている。

（山城 満）